

ゆずな歳時記

七月十一日 「好敵手」



■小野寺 陽子

ゆずなのクラスメイト。押しが強さと行動力を持つクラスの中心人物だが、意外と足元がおろそかで、八重垣 縁里にはよく隙をつかれて防戦一方になる。



■若木 ゆずな

本編の主人公。御蔵橋に住む中学一年生の少女。ちんまりとしたおさげ髪とどんぐりまなこが特徴。早くいちにんまえの大人になりたいと願うが、そそっかしさからの失敗も多い。

■八重垣 縁里
ゆずなの中学校のクラスメイトで骨董屋の一人娘。古風な丸眼鏡をかけており、けだるげで淡々とした言動を常とする。クラスの影のご意見番。



■雨宮 旬

蔵橋に引っ越してきた少年。おっとりとした繊細な風貌と物腰を持つ。恋多きひとである母に連れられて各地を転々として育ってきたこともあり、御蔵橋に来るまでは内向的な面を隠し持っていた。

■小川 千穂

ゆずなのクラスメイト。おっとりとした雰囲気とはうらはらのしつかり者で、個性派ぞろいの1年1組を学級委員としてまとめあげる。

■荻野 朱美

ゆずなのクラスメイト。居酒屋の娘であり、その家業のためか、西洋人形めいた風貌とうらはらに行きすぎなまでに目立っていた言動が目立つよく屋上でうたた寝している。



■寛 笠介

ゆずなのクラスメイト。小動物を思わせるつぶらな瞳と、温厚で人懐っこい気質の少年。

「――勝負よ、縁里」

静かな、けれども力に満ちあふれた声が放課後の教室に響きわたった。

窓際で黒板消しをはたいていた、ゆずなが振り返ると――

席に着いた八重垣 縁里の正面。仁王立ち、といつてもいい姿勢で屹立しているのは果たして、小野寺 陽子――陽子ちゃんにほかならなかった。

唇に浮かぶのは、不敵な笑み。二重瞼の猫目に凜とした光を宿して、彼女は手に持ったちいさな手提げ袋を前に突き出す。

教室に残っているのは、陽子を含めて五人。今日の日直の縁里と、手伝いをしていたゆずな。放課後の屋上うたた寝から戻ってきた荻野 朱美。鞆に教科書を詰め込む途中だった筧 笠助。

そのうち三人の視線が、陽子と、陽子の手にした手提げ袋に集まった。なんなのだろうか、あれは。あの中身は。

すこしばかりはりつめた沈黙のうちに、時間が経過する。

十秒。二十秒。

陽子の顔に浮かんでいた不敵な笑みが、訝しげな表情へと変わり、やがて苛立ちあらわな顔つきに転じる。

問題は。

当の陽子と、ゆずなたち三人を除くひとり。いちばん肝心な人間が、目の前の手提げ袋にまつたく反応を示さないことで。

「――ちよつと――縁里っ！」

とうとうしびれを切らした陽子が、てのひらでばんばんと机を叩いた。

「だんまりはないでしょ!? こっち向きなさいよーっ！」

「――おや、陽子さん」

微妙に泣き出しそうな陽子の声に、縁里はようやく顔をあげる。今気づきましたといったふうな、いつもどおりの淡々とした口調と表情で。

「申し訳ありません、日直の日記をつけていたものでして――」

愛用の万年筆を筆箱にしまうと、丸眼鏡のレンズ越しに縁里は陽子を見あげた。

「私に何かご用でしょうか？」

「……まつたくつ。」

まあいいわ縁里。始める前に勝負と関係ないところで責めたてて怯ませたんじゃ、フェアじゃないものね」

気を取り直したように、陽子は不敵な笑みに戻って肩までの髪をかきあげた。

「今日は、ゲームの誘いに来たのよ。一局つきあつてもらおうと思つて」

件の手提げ袋を、縁里の眼前にさらにずずいとつきだす陽子。

『机の上でできる遊びなら、またいつでもお付き合いますよ』つて言つてたわよね」

「はて、言いましたか？」

首を傾げる縁里に、陽子の笑みがひきつった。

「言つたわよ！ ほら、あの、この間——、つ、あんたん家でオセロしたとき！」

「……ああ」

くすりと、縁里が微笑む。陽子を見やる目を、レンズの奥で静かに細めて。

「な、何よその笑いかたは！」

陽子の頬が、一瞬で真っ赤になる。

「言つとくけど、あのときはちよつと油断してただけなんだからね！
普通にやったら、あんな負け方ぜつたいしないんだから！」

「そうですか。わかりました」

棒読みめいたそつけなさで応える縁里に、陽子は肩をつりあげ——しかし、痲癩をどうにか抑えた様子でひとつせきばらいをしてみせた。

「とにかく！ そういうわけだから、嫌とは言わせないわよ。今日はあんたの店定休日なのも知ってるんだから」

縁里の机に置かれた手提げ鞆が、こつん、と硬めの音をあげた。

その鞆の上にてのひらを置いて、陽子は縁里に顔を近づける。

「——勝負よ、縁里」

「やや、久しぶりに見たつすねー、小野寺おのでらのチャレンジも」

ゆずなの横に駆け寄つたかけい篤くんが、すこしばかり声をひそめて耳打ちした。

「ちした。」

「やつぱり諦めてなかつたんすか」

山栗鼠やまりすを思わせるつづらな目を細め、うんうん、と彼はうなず頷く。

「……でもつて、今日はなんなんだ？ 勝負つーのの種目は」

いつの間にか、朱美ちゃんもゆずなの机にひじをついている。長い黒髪あけみの似合う整つた面立ちに、それとはうらはらの緩んだ笑みを浮かべて。

「オセロもやってたのか。どうだったんだ？　ちつとは健闘したのか、それともけちよんけちよんだったのか？」

朱美ちゃんの言葉に、ゆずなは頷くのも応えるのもためらわれて、ちよつとあいまいな笑みを浮かべた。

ゆずなも一応、居合わせてはいたのだ。一ヶ月ほど前の土曜日、縁里ちゃんの家遊びに行ったときに行われた、オセロの勝負の場には。

ひとつ残らず、真っ白になった8×8のます目。そのます目を前におんなじように真っ白になった陽子ちゃんの顔は、当事者ではない自分がいま思いついてもちよつと胸が痛む次第である。

「ええと——福笑い、すごろく、軍艦ゲーム、神経衰弱、ダイヤモンドゲーム——」

つづらな目を細めて、寛くんが指をおる。

「今年に入ってはそんなところっすか」

「あ、あとたぶん、あやとりと五目並べもあったと思う……」

「それにオセロっつーことは、ホント、次はなんだろうな——あの袋の大きさをからするとだぜ、」

ゆずなたち三人のひそひそ声をそのとき、がつんつ、という硬めの音

が遮った。陽子ちゃんが手提げ袋を、縁里ちゃんの机の上に勢いよく置いた音だった。

ふふん、と鼻で息をつくのと、陽子ちゃんは手品師めいた仕草で布の袋を取り払う。

その中から現れたものを見て、ゆずなはどنگりまなこを見開いた。

蝶番ちようがいで二つ折りになった白木の板。その表面には黒い線で描かれた

ます目。側らに転がったのは、おそらく駒入れなのだろう。お豆腐一

丁くらいのサイズの木製の箱だ。

あれは、あれはおそらく——

「なるほど、将棋っすか」

ゆずなの憶測に、寛くんの声が重なった。

「まあ、定番といえれば定番っすよねえ。そっか、いままで将棋は勝負してなかったんすね」

「で、どうなんだろうな——」

興味深げな笑みを、朱美ちゃんがこちらに向ける。

「将棋は初対決なんだろう？　ふたりとも腕の程はどんな感じなんだー？」

その問いに、ゆずなは答えなかった。どんぐりまなこを見開いて、数メートル向こうの友人ふたりの対峙を見つめるのみだ。

戦慄する、というのはきつといまの自分の状態のことなのだ、ゆずなはちよつと思う。

「——ひとつ、条件があります」

静かな声で、縁里ちゃんが教室内の沈黙を破った。

「な、何よ」

すこし気圧された感じで、陽子ちゃんが応える。

「何か賭けるとか、そういうの？ 私は構わないわよ。今度の土曜のお昼のあんぱんとか、お菓子とかでも。それとも、負けたほうが勝ったほうに膝ついて頭さげるとか——」

「いいえ」

楚々とした色白の横顔に、表情は読み取れず。縁里ちゃんはゆつくりと首を横に振る。

「勝敗に懸賞を設けようとは思いません。私が提案したいのは、対局の規約についてです」

「へ？……何よ。言つてらんないな」

「投了はなしで、ということにしませんか？」

「へ？」

「途中でまいった、はせずに、最後まで勝負をしましょうということですよ」

鼻白んだ陽子ちゃんに、縁里ちゃんが言葉を重ねる。

「なんだ、そんなこと？」

不敵な笑みをよみがえらせて、陽子ちゃんが大仰に肩を竦めた。

「望むところだわよ。そんなこと言つて、あとでまいったしなくなつてもしらないんだから。なんたつて将棋は私、パ」

そこで陽子ちゃんはへんてこな形に口を嚙むと、赤くなつた顔でひとつふたつ咳払いをした。

「お、お父さんに教えてもらつて、車角抜きならたまには勝てるくらいになつたんだから。オセロや五目並べとは違うんだからね！」

「パ、パ？」と、教室中のおそらく誰もが思ったけれどあえて口にはしなかった。

「いいわ。まいったはなし、待つたもなし、時間制限はなしの一局勝負で。ちよつと——ゆずなたち、見届け人をお願いしてもいいかしら」

急に話をふられて、ゆずなは思わず頷いてしまう。側らの朱美ちゃんと寛くんも、おういぜー、いいすつよー、と快諾の言葉をかえす。

ああ、しまった、と、ゆずなはおろおろまなざしをさまよわせる。

うなずいてはいけなかった。いまは好機だったかもしれないのだ。どうにかして、陽子ちゃんと縁里ちゃんの間に入るための。

いや、いまからだつておそくはない。とにかく、なにか言葉を発するところからだ。なんでもいいから。

気力をふりしぼり、ゆずなは息を吸って唇を、

「先後手は、どうなさいますか？」

唇を開くより先に、縁里ちゃんの静かな声が午後の教室に響いた。

「私のほうは、どちらでも構いませんが」

細く白い指が木の蓋をとり、開いた将棋盤の上に駒をあげた。

縁里ちゃんの仕草はあくまでも静かで、崩れる駒の山の木の音すら、

どこか整然として聞こえる。

「じゃ——じゃあ、あなたが先手でいいわよ、縁里」

への字から唇の端をあげて、陽子ちゃんは余裕の笑みをつくってみせる。そう、つくってみせたことがこつちで見てもわかってしまうくらい、ちよつと無理をした感じの余裕の笑みで。

「あんまりやったことないなら、ハンデで少しくらいこつちの駒を落とすわよっ。」

縁里ちゃんは声では答えずに、静かに首を横に振った。丸眼鏡の奥

の瞳はいつもながらに淡々と、感情の色をうかがわせず——盤上を滑る指はさながら機械仕掛けのような動きで、迷いなく駒を並べていく。

む、と唇を結んで、陽子ちゃんが駒を並べる手を早めた。ふたりの間の空気がいくぶん張り詰め、見守るゆずなたち三人を巻き込んで、沈黙が教室を支配する。

ああ——間に合わなかった、と、ゆずなはがつくり肩を落とした。

なんだか既に勝負は始まってしまった感じであり、こうなるともう、とても言葉を挟める空気ではない。

——ごめんっ。

胸の中で、ゆずなはあやまる。

顔を伏せて、ちらりと見あげた視線の先で、両者が駒を並べ終えた。

陽子ちゃんと縁里ちゃん、ふたりのまなざしが盤の上に交差し、数秒の間において陽子ちゃんがひとつ頷く。それを受けた縁里ちゃんが、ひとつ目の駒を動かした。

2六歩。

飛車の前の歩をひとつ前に出す、第一手としては定番なのだという打ちかた。

同じだ、と、ゆずなは思う。

確かあの時も、縁里ちゃんは最初はあの駒の動かしかたをした。

ずいぶん前、縁里ちゃんの家遊びにいつて——当時自分も覚えてただった将棋で、ひよんなことから縁里ちゃんと対局することになった、あの時と。

ごくろりと唾を飲んで、ゆずなは向き合うふたりの横顔を見つめる。

楚々とした顔に淡々とした表情を浮かべる縁里ちゃんと、早くも眉を八の字にして盤を睨む陽子ちゃん。

ごめん！と、ゆずなは謝る。

ごめん、陽子ちゃん。できなかつた。

友達ならば、止めてあげるべきだった。ここにいなかくでおそらく唯一の経験者である自分が、忠告してあげるべき——教えてあげるべきだったのだ。

まだ覚えて間もないという将棋で、八重垣 縁里に挑むという行為が、どれだけ無謀で危険きわまりないものであるかということ。